

自然保護委員研修会 東福寺から伏見稻荷山 自然保護委員 岡田茂久

自然保護委員の知識向上のために、今回は身近な伏見稻荷山を研修フィールドとして選び、自然と歴史についての勉強会を実施した。リーダーは自然関係担当の谷角委員、歴史関係は杉村委員が担当である。

2020年10月11日午前9:00にJRと京阪の複合駅、東福寺駅東口に12名の自然保護委員が集合。14号迷走台風の余波で今一つすっきりしないが、時折太陽も差す天候で雨の心配は無さそうである。

東福寺駅前、北向き一方通行の府道201号を南に下り、九条高橋の下をくぐり南側側道を左折する。谷角リーダーには通い慣れた道らしい。風情ある店の前を通り、小路を何度か折れて「退耕庵」の門前を出て杉村委員から説明を受ける。



退耕庵

【退耕庵】：臨済宗東福寺派の大本山・東福寺の塔頭で「たいこうあん」と読む。1346年に創建。門前には戊辰役殉難士菩提所と刻まれた石碑が立っている。

本尊は千手観音であるが、山門を入ってすぐ右にある地蔵堂が有名。小町が貰った恋文を腹中に収める玉章(手紙という意)地蔵。2mを超す大きな座像である。堂には「小町寺」の扁額が掲げられ、本堂の本尊の千手観音の傍には小町作の小野小町100歳の像、小町が水鏡に写った年老い姿を嘆いた「小町100歳の井戸」が脇にあり、小町ゆかりの寺として知られる。地蔵は明治7年に廃仏毀釈で廃寺から移設されたものという。



退耕庵での説明

応仁の乱で庵も荒廃したが、慶長年間に安国寺恵瓊が再建。天下分け目の関ヶ原

合戦の前年には、境内の昨夢軒という四畳半の茶室で、安国寺恵瓊、石田三成、小早川秀秋、宇喜田秀家が徳川家康討伐の密議をしたと伝える。今も昨夢軒には忍び天井、護衛の武士が控えていたとされる伏侍の間もあると聞く。

幕末の鳥羽・伏見の戦いの際、東福寺に長州藩の陣が置かれ、退耕庵は戦死者の菩提寺となった。その縁で長州出身である安倍前総理の祖父で、昭和の巨頭「岸信介」お手植えの槇が地蔵堂の脇に植っている。(9:10~25)



退耕庵の石碑



明暗寺境内



十万不動五大堂・同聚院



【明暗寺】: 退耕庵の角を曲がり、しばらく行くと明暗寺(みょうあんじ)、門の右柱には善慧院(ぜんねいん)ともある。非公開寺院で苔庭が美しいと聞く。普化正宗総本山の寺院。山号は虚霊山、本尊は文殊菩薩(もんじゅぼさつ)、尺八根本道場。元々は三条白川にあったが廃仏毀釈により廃宗廃寺となったが、本尊や創建者の虚竹禅師像などが東福寺の塔頭である善慧院に預けられ、明治23年(1890年)、「明暗教会」として復興。昭和25年(1950年)に善慧院に間借りする形で「宗教法人普化正宗明暗寺」として再興されたという。

虚無僧は剃髪をせず深い釣り鐘方の編み笠に、下駄履きで太刀を差した粋な姿で、尺八を吹きながら行脚する半僧半俗の禅僧である。

最近は見ることはずないが、小生の子供のころは虚無僧が「明暗」という文字を書いた偈箱を掛け、家々の前で尺八を吹鳴し喜捨を乞うているのを良く見かけた。

【十万不動五大堂同聚院】: 次いで同じく東福寺の塔頭の十万不動五大堂の同聚院(どうじゅいん)に立ち寄る。この十万は万の字の上に十を重ねて一字としている。

平安時代に藤原道長発願で五大明王を安置する五大堂が建立されたが、鎌倉時代初期には衰微し、そのあとに東福寺が招請され、同聚院は五大堂があったあたりに建てられている。五大堂の丈六(265cm)の不動明王坐像がご本尊で重要文化財に指定されている。

丈六の巨大な不動明王坐像に直面できるかと思ったが、堂内が改修中でご本尊は博物館に疎開中であり、お目に懸ることはかなわなかった。火災除け、災難除けを



臥雲橋



通天橋

はじめ除災に靈驗あらたかな不動様として信仰されている。

【臥雲橋】:同聚院から100mも歩けば車両進入禁止の石柱が立ち、屋根の懸かった橋が臥雲橋(がうんきょう)。

東福寺境内を縦断し臥雲橋の架かる谷を「三の橋川」、またの名を「洗玉澗」(せんぎょくかん)という。

境内に架けられた3つの橋は、上流から偃月橋・通天橋・臥雲橋といい「東福寺三名橋」と呼ばれる。単層切妻造・棧瓦葺きの木造回廊橋。そのうちの偃月橋は1603年(慶長8年)の建築で重要文化財。「日本百名橋」に数えられるが、臥雲橋は一般道路として供用されている。

往古は桜の名所として知られていたが、あまりに美しいため、禅の修業の妨げになるとして伐採されてしまい、代わりにモミジが植栽されたという。おかげで当地の紅葉と新緑はまさに絶景である。



東福寺境内

【東福寺】:臥雲橋を通り抜け、西方道路から入る「日下門」から東福寺境内に入る。

境内はコロナ禍の影響がまだまだ濃厚な世間であるが、さすが名刹でかなりの観光客で賑わっている。

1236年(嘉禎2)鎌倉時代前期、関白九条道家によって創建された東福寺は、奈良の東大寺と興福寺の「東」と「福」をとって寺名としている。

禅宗寺院京都五山の第四位の格式を誇った寺で、境内には諸堂が立ち並び三門、法堂、仏殿、方丈、浴室、東司をはじめ、その多くは国宝や国の重要文化財に指定されている。

五山というのは中国南宋で定められていた制度を取り入れたもので、第何位の格式と



東福寺本堂



東福寺三門



東福寺六波羅門

いうのは鎌倉時代から室町にかけて、その時代の施政者(幕府)の意向や協力度で変わり、寺名も決まっていたのでは無く、南禅寺は別格で五山の上であり、大徳寺や天龍寺が入っていた時代もあり、幕府にたてつくことが多かった妙心寺などは、名が挙げたこともない。

杉村委員のユニークな説明が始まる。京都禅宗寺院にはそれぞれの特徴を表す俗称がつけられている。

まず南禅寺は主に武将から信仰を得たことから武家面(ぶけづら)。

学問や文学に秀でた禅僧を輩出したことから、建仁寺の学問面(がくもんづら)。

千利休など茶人と由縁が深い大徳寺の茶面(ちゃづら)。経営が上手いことから妙心寺の算盤面(そろばんづら)。経声が美しいということから相国寺の声明面(しょうみょうづら)。

京都で最大規模の伽藍があったことから東福寺の伽藍面(がらんづら)と言われており、今なお東福寺は寺の塔頭(山内寺院)が二十五寺もある大寺院で、日露戦争の時には寺域が接收され、ロシア兵の捕虜収容所にもなったという事もある。

本堂は 1881 年(明治 14 年)に火災で焼失した後、1934 年(昭和 9 年)に再建された。入母屋造、裳階付きの高さ 25.5 メートル、間口 41.4 メートルもある大規模な堂で、昭和の木造建築としては最大級である。

22 メートルに 11 メートルの本堂(仏殿)中央部の天井に書かれた昇竜図は、堂本印象画伯の筆により、わずか十七日で描き上げられたと言われている。

本堂の南正面が「三門」。通常、寺の領域に入る門は山門であるが、特に禅宗の大寺等では「山門」とは別に「三門」が建てられていることが多い。悟りに通ずる三つの解脱の境地-空、無想、無願を表す「三解脱門(さんげだつもん)」からきているとされて、現存する禅寺の三門としては日本最古のもので国宝である。

東福寺境内南方の門は、鎌倉幕府六波羅探題の門を移築したと伝え「六波羅門」という。



「六波羅門」を出た処に一叢の萩があり、白い花を残していた。その周りを青灰色の小さな蝶が飛び回っている。

今年度新しく自然保護委員会に入られた蝶に詳しい委員の解説では「クロマダサソテツシジミ」という。元々は南西諸島に生息する蝶であったが、近年の気候温暖化による影響らしく、関西地方でも普通に見られる様になったということである。

南西諸島では「ソテツ」を食い荒らす大害虫ということであったが、本州では「ソテツ」は何処でも見られる植物ではなく、仕方なく残り少ない萩の花の蜜を吸っているようである。(9:35~45)



東福寺境内南の六波羅門を出て、東へ200メートル程緩い坂道を行くと、右手に九条陵、月輪南陵併記の石柱と、防長藩士の墓の案内石柱が建ち、栗石で舗装された参道が登っている。

九条陵とは仲恭(ちゅうきょう)天皇陵、月輪南陵は崇徳天皇皇后聖子の陵である。

展望は良いが歩き難い参道を登ると、右手に崇徳天皇

皇后聖子の陵があり、さらに登った参道突き当りの鬱蒼と茂った森陰に九条陵がある。

月輪南陵は崇徳天皇皇后聖子の陵、崇徳上皇は「保元の乱」で、後白河天皇と皇后聖子の父藤原忠道等の連合軍に破れ、讃岐に遠流され、悲憤のうちに舌を噛み切って崩御されたという。「崇徳上皇怨霊説」は有名である。

皇后は天皇の遠流先の讃岐に同行できず、父と夫の中挾になり別れ別れになり、再び会うことも出来なかった悲運の皇后である。

仲恭天皇は第85代の天皇(在位1221.4.20~1221.7.9)わずか4歳で即位、「承久の変」に際し北条氏に強要されて在位70日で譲位。このため後廢帝、九条廢帝と呼ばれ当初は天皇には数えられな





トレイル標識4の石段

かったが、明治3年（1870）に仲恭天皇の諡号が贈られた。悲運の天皇である。

九条陵手前右手に樹木に囲まれて防長藩士の墓。鳥羽伏見の戦いでの長州藩戦没者、振武隊石川厚狭介以下48名の墓碑が並んでいる。墓碑の脇には山口県出身の政治家、岸信介、佐藤栄作の参拝記念植樹があった。防長(周防・長門)＝長州(9:55～10:00)



標識5「三の橋川」に沿って上流へ

防長藩士の墓地を通り抜け、裏手の山道を左に登ると住宅街の裏手から住宅街の道路に出られる。住宅街を通り抜けると京都一周トレイルの「東山4」標識の建つ稲荷神社裏参道である。

「東山4」標識を右に見て石段を下ると、「東山5」の標識のある小川に会う。



清滝の不思議な樹

(10:05)

この小川は先程通り抜けてきた東福寺「三の橋川」の上流である。川に沿ってさらに川上に向かう。うわみず桜、ライトブルーのくさきの実、笹竹に似るが笹とは全く異なるチジミササ、川畔の「桐の木」の説明を植生に詳しい中島委員から聞く。

稲荷の聖地「清滝」分岐の道端に、木芯は腐食したが表皮だけが残った不思議な樹木を見る。(10:25～35)

清滝で林道と別れて、沢沿いの山道を山科西野との峠に登りつく。「三の橋川」の源流である。峠の左は天皇家の菩提寺「泉涌寺」の領域、ツルアリドウシの説明。

(10:50～55)

計画では東山区と山科区の区境界添いの道をコルまで登り、三角点峰を折り返す予定であったが、直接三角点峰にとりつくコースに変更する。峠の小塚の前を左の山道に入る。

時折急傾斜があるが概して緩斜面の登りである。雑菌に侵され、傘が真っ白になった「イグチ」の仲間らしいキノコがあちこちに見られる。途中、道が平坦になると、西野への道が左方向に分岐するので注意。

三角点は標高239m、三等三角点、点名西野山、通称稲荷山三角点と呼ばれ



大岩神社

ている。倒木も多く木立に囲まれ展望のない頂上である。
(11:10~20)

稲荷大社お山巡拝路に合流するまでは、枝道も多く注意して歩く。「お塚」の前まで来れば道ははっきりし安心だ。「お塚」とは稲荷信者個々の「我家の稲荷様」のことで、稲荷山全体で1万基以上もあるらしい。

区境界のコル分岐手前で、標識は無いが顕著な左の分岐へ入り少し降れば、100m程で「大岩神社」である。

大岩が御神体で大岩の下部を舞台造りとして拝殿と踊り場がある。感動すること請け合い。ぜひ訪問されることを推奨する。大岩神社には稲荷山南山麓の「白菊の滝」からも、容易に登れる参拝道がある。



一の峰 末広大神

区境界のコル分岐から、稲荷大社お山巡拝路までの山道は、過年の台風で見るとも無残なほど痛めつけられ、長期間通行不能だったが整備が完了し歩けるようになった。

過大な労力が必要で関係者のご尽力に感謝したい。この道の北方の高みを「僧正ヶ峰」と呼ぶ。

左手に鳥居を見ると、山麓の「末広の滝」を經由する七曲り巡拝路の合流点、鳥居が通称「七曲りの鳥居」。合流点を右方向に曲がり、鳥居の合間からお山巡りの巡拝路に合流する。

「一の峰」は標高 233mの稲荷山最高地点で、合流地点から巡拝路を左にとれば一息である。

「上の社」とも言い「末広大神」を祭る。
(11:55~12:00)

結構の人が休んでいる。人込みを避けようと塚の裏手に回ると、5・6個の団子を重ねたような木の実が落ちていた。「オガタマ」の実。巫女さんがお神楽を舞うとき手に持ち振り鳴らす神楽鈴の原型である。

「一の峰」から順路で稲荷お山巡拝を始



オガタマの実



御膳谷奉拝所



眼力社



四つ辻(見付の峰)



晴天日の荒神峰からの展望



荒神峰での全員集合写真

めると、長い石段を下りた先の祠が「長者社神蹟」。剣石、雷石(みつるぎさん)、三条小鍛冶宗近の謡曲「小鍛冶」に由来する。

石段を降りたところに、「山科の里 大石良男旧跡」の石標があるが、三角谷を経て「三の橋川」の源流の峠から、山科西野に降る道らしいが、既に廃道になっているようだ。

次いで「薬力社」と「おせき社」、薬の世話にならない暮らしと、咳を鎮めることに靈験あらたかと聞く。

「薬力社」から分岐する道を右へ行くと「傘杉社」である。「傘杉社」から清滝の手前まで降り、紅葉谷を登って来れば、春日峠の手前で同じこの巡拝路と合流する。

「薬丸社」を過ぎ、紅葉谷分岐からの緩い登り坂が「春日峠」で、明治になってから頂上の茶店の裏で「経塚」が発見された。右足元の谷が「紅葉谷」である。

「春日峠」を降りると「御膳谷奉拝所」で幽邃な御塚が林立する。古来、峰の神々に神饌(お齋)を、日々供する神事が行われる。

「御膳谷奉拝所」と「眼力社」中間の茶店地下に、参拝者用トイレがあるので拝借。

次に「眼力社」、目の病に御利益があり、狐の青銅像の口から冷水が出ていて、参詣者の目を引き子供達にも人気がある。

「眼力社」から次の「大杉社」の辺りは湧水が豊富で「カキツバタ園」があり、花の季節には参詣者の目を楽しませてくれる。

「大杉社」から5分も緩い石段を登れば「四つ辻」で、何かホッとする休憩場所である。

見付の峰、石灯籠とも呼ばれ京都市内の展望が良く、高いビルのない昭和20年代には大阪城天守まで望めたい。

四つ辻にある茶店が、「にしむら亭」である。俳優の西村和彦さんの生家。「ここから日吉高校に毎日通ってましてん」と、京都一周トレイル開設時に御尽力頂いた先代



御幸奉拝所



横山大観筆塚



新池(こだまヶ池)

の店主が話してくれた。

ここでも大勢の観光客が休んでいた。

「四つ辻」の手水所の脇から石段を数段登り、左に分岐する道は「御幸辺の道」といい、「標識 3-2 京都一周トレイル」のコースである。

左折せず真っ直ぐに急な石段を登るのが「田中社神蹟」。

「田中社」のお塚の間を抜けると「荒神ヶ峰」で、すこぶる展望が良い。高さ8mの鳥居を形どった架台があり、祇園祭の宵山の頃に、131個の提灯に灯が入り夏の風物詩になっている。大勢の先客があったが、我々もここで昼食とする。(13:30~14:00)

記念撮影後に西北方向の狭いコンクリート階段を降る。鞍部の十字路を右に降れば白滝の行場。左に降れば「御幸辺の道」で「京都一周トレイル標識 3-3」である。

そのまま直進すれば「御幸辺の道」と合流し「御幸奉拝所」がある。

あいにく神事が行われており、神主さんの祝詞の最中であつたので、ゆっくりと拝観は出来なかったが、「御幸奉拝所」に林立するお塚は、陰陽を模してあり壮観である。

邪魔をしないよう、外周を回って奉拝所の奥にある「横山大観筆塚」にたどり着く。塚の背面には絵筆の軸にしたという「黒竹」も確認できた。

塚の裏の藪を掻き分けて入ると、この下を貫通している自動車道路の「稲荷山トンネル」換気口があり、話のタネにと蜘蛛の巣をかき分け見学に行く。

「御幸奉拝所」前から急坂の舗装道路「御幸辺の道」をそのまま降れば、朝に通過した「京都一周トレイル標識 4」に降る。

「御幸辺の道」を「四つ辻」まで引き返し、お山巡拝路を稲荷本殿方面に降る。(13:15)

途中、「熊鷹社」の背後にある新池(こだまヶ池)に立ち寄る。池に向かって柏手を打ち、そのこだまが返ってきた方向に願い事が叶うという。試してみるが「こだま」自体返って来たのか判らない。願い事はなかなか聞いて貰えそうも無いようだ。



鳥啼庵(ちょうていあん)



ひざ松様



深草ルート合流



千本鳥居

(13:30~40)

山麓の公衆トイレまで降り巡拝路から別れて、「神田」と「八島ヶ池」に向かう。

「神田」には刈り取り前の神饌に供する稲がたわわに実っていた。

「八島ヶ池」では「アオサギ」と、幸運にも「カワセミ」が飛び立つのが確認できた。

「八島ヶ池」の南畔には新しい休憩所がある。「鳥啼庵(ちょうていあん)」といい、稲荷茶屋という茶店を併設し近年に建てられたものである。

再び順拝路に戻り、「京都一周トレイル東山コース 2-2・深草トレイル F35」の合流地点、標識前にある「ひざ松様」に立ち寄る。

「ひざ松様」は松の根株で、人の膝様の部分をオブジェ化したもの、足腰の病に靈験あらたかということで、先代「ひざ松様」は信者が根株のひざ様部分を撫ぜ廻したせいで、ぼろぼろの無残な姿となり、

傷んだ部分は包帯で補修されていたが、近年に屋根付きの新しい根上松に新調されたものである。

(14:00~14:10)

「ひざ松様」の対面、京都一周トレイルコース標識を右に登れば、「伏見神宝神社=ふしみかんだからじんじゃ」で、今回は立ち寄ら無かったが、平安時代(794年~1185年)に創建されたと伝え、死人も生き返るといふ十種の神宝、かぐや姫ゆかりの叶雛、竹製の鳥居、狛犬ではなく

天竜・地龍等々、境内には珍しいものがたくさんある。

奥の院から千本鳥居を降る。本殿上の新しい「神厩」の奥に、本殿右奥からエレベーターが設置されていた。厩の裏から千本鳥居入口までスロープも設置されている。

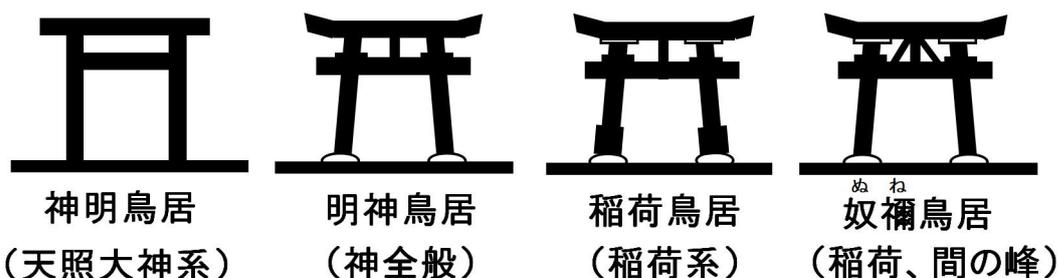
スロープ脇の喬木に、沢山の小鳥が群れており、最後に思わぬ探鳥が出来た。

今回出現確認できた鳥は、アオサギ、トビ、

カワセミ、コゲラ、カケス、ハシボソカラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジユウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、ムクドリ、スズメの15種類であった。

伏見稲荷本殿裏での解散は(14:30)であった。

※ 杉村委員が主な鳥居の種類を解説されていたので紹介する。天照大神が天岩戸に隠れた時、出て頂くのに「長鳴鳥」を鳴かせた止まり木の形から「鳥居」となる。



※ 杉村委員資料による稲荷山(伏見稲荷大社)の概要抜粋。

- 稲荷山は民衆信仰の山であり、商売繁盛・家内安全・交通安全・芸事上達の守護神として信仰を集める。全国3万社以上といわれる稲荷社の総社である。
- 創建は和同4年(711年)「秦伊呂具」が稲荷神社を山上に祀る。秦氏は5・6世紀頃大陸から渡来。一説では全国で2万人近くが渡来、全国に散らばり土着したといわれる。
- 山城の国では葛野・太秦近くに住みついた「秦川勝」は、聖徳太子のブレーンとなり古代大和國家の発展を陰で支え、深草一帯に住み着いた「秦伊呂具」も、田畑を開発し裕福な集団となっていた。平安京造設時には秦一族が広大な土地を提供したといわれる。
- 稲荷(いなり)の語源は、農業(穀霊)神であるから稲成(いねなり)から、また、田畑への水を供給する農業神の象徴として、雷鳴を意味する「居鳴る」からとも言う。
- 祭神は先住民「荷田氏」の信奉する祖神、農耕・殖産を司る「宇迦之御魂神」、秦一族の信奉する家族和合・商売繁盛を司る「大宮能売大神」、それに天孫降臨の際に道案内をしたことから、人生を切り開き開運を司る「猿田彦大神」を本殿中央・右・左に祀る。
- 稲荷山信仰と狐(キツネ)との関係は定かでは無い。一説に狐は冬になると山から里に下りて来て、穀物を食い荒らすネズミを採って食べる習性と、山に住む神「山神信仰」が結び付き、狐は「宇迦之御魂神」の使者・化身と考えられるようになったのではという。
- 稲荷大社のように大社のつく神社は、もともとその地に居られた「国ツ神」を祭る神社に多い。ちなみに神宮は「伊勢神宮」のように天皇家に由縁のある神社である。

